

自信がなかった私

金屋中・2 大見 咲稀

勉強ができて運動好きで人見知りがなく誰とでも話せる。とてもかわいらしく、スタイルがよい。特技は小学三年生から習っているバスケットボール、趣味は本を読むこと。これは私ではなく私の親友のりんだ。それに比べて私は、勉強ができてなくて運動が苦手で見知りがすごく初めて話す人とは会話が續かない。父親似の顔でスタイルもよくない。趣味もなく、一つ自慢できるのは、小学二年生から習っているテニスだ。私とりんはきれいに真逆である。

初めて会ったのは、小学二年生の頃、りんがフィリピンから転校してきたときだ。人形みたいにかわいくて、くせ毛の女の子という第一印象だった。言葉が分からなくて話すのは大変だったけれど、遊んでいるときはとても楽しかった。私とりんはずっと一緒にいた。休み時間も学校終わりも。ずっと一緒にいたら、他の子とりんが友達になれないと思つて、私はりん聞いた。

「私とずっといいいの？」

すると、りんは、

「いいの！咲稀といるの楽しい。」

と言ってくれた。うれしかった。けれど、やっぱりりに友達ができなくなるのは嫌で、

「他の子と遊んできていいよ。」

と私は言った。少し冷たい態度をとってしまったと焦ったが、りんは、

「そうだね。じゃあ咲稀も行こう。」

と言ってくれた。すると、りんは話したことが少ない子に、

「私たちも入れてくれないかな。」

と言いに行った。私ならきつと、そばでもじもじすると思うのに、りんはすぐぱつと言つていたから、すごいと思つた。りんのおかげで、あまり話したことなかった子と友達になれたことが多かった。

三年生のクラス替えのとき、りとクラスが離れてしまった。私のクラスには、りんのおかげで仲良くなつていた子がいたので、一人にはならなかった。でもりんは、初めて接する子が多かった。私は心配だったが、りんにはすぐに新しい友達ができていた。私はうれしかった。でも、りんが他の子と遊ぶ時間が増えるにつれて、私と遊ぶ時間は少なくなった。りんのおかげで仲良くなった子ともうまくいっていなくて、私は少し不安になつていた。りんはこのまま他の子といたほうが楽しそうだなとか、私だけじゃ楽しくなかったのかなとか、いろいろなことまで考えてしまうことが多くあった。だが、りんは帰るときに話してくれたし、週に一回は遊んでくれた。そのおかげで不安な気持ちはずっといった。私はこのとき思った。りんがいなくて私はすごく不安になるんだと。りんからアドバイスがないと他の子とうまく話せないんだと。

私とりんが小学六年生になったとき。二人とも互いに友達ができて、楽しく学校生活を送つていた。けれど、ある日りんから、

「私、バスケが強い中学に行く。」

と言われた。りんがバスケットボールが好きなのは知っているし、応援したい。けれど、私はこれまでりんがいたから頑張っていたし、うまくいっていたのに、と急に不安な気持ちがわいてきた。私中学で大丈夫なのかとか、これからどうすればいいのかとか、部活に入るから会えなくなるとか、いろいろなことを想像して頭が真っ白になつてしまった。

次の日、今私が思っていることを全てりに伝えてみた。するとりんは、

「咲稀は自信がないんだよ。もっと自信をもつて。すぐ下を向かずに、ずっと前だけ見て進めばいいんだよ。失敗を恐れないで。落ち

こまずに、まずは頑張ってみて？何かあったら話聞くから。もう、このままだと心配だよ。」

と言われた。そのとき私は、まさかりんが思っていることを言ってくれると思わなかった。むしろ私は困らせてしまうなど不安だった。でも、りんの思っていることを聞いて、頑張ろうと思えた。中学生にもなつて親友に頼りすぎるのもよくないし、自分一人でも大丈夫というところをりんに見せたい気持ちもあった。だから、私は満面の笑顔で言った。

「ごめん。いつも頼りすぎだね。見とけよ。私中学一人でも大丈夫っていうところを見せるから。でもたまには相談聞いてね。」

りんは、私に對抗するような笑顔で、

「あたりまえでしょ。」

と言ってくれた。それから卒業までの時間を二人で、満足するまで話したり遊んだりした。

私は本当にりんに出会えてよかったと思うし、親友がこの子でよかったと思える日がたくさんあった。私はりんのおかげで今、たくさんさんの友達に囲まれて、毎日笑えているんだと思う。りんが小学生の頃に行ってきたように、私も笑顔であまり話したことのない人にももじもじせず話しかけることを意識するようになった。りんの言葉がなかったら、私は今頃自信がなくて、ずっとりんに頼っていたのかなと思う。そう思うとりんには感謝の気持ちでいっぱいだ。もし、中学がそのまま一緒だったら、うれしいけれど、今の友達とは話せていないかもしれないし、りんを困らせてしまうと思う。そう思うと違う中学でそれぞれ新しい一步を踏み出せてよかったなと思う。あのとかりんにあの言葉を言ってもらえていなかったら、私は大変なことになっていたんだろうなと思う。

今、中学二年生になつても、月に三回はりんと会える時間がある。そのときには、愚痴や中学校の友達の話などたくさん話を聞いてもらっている。りんもバスケットボールの練習があり、会えない日

もある。けれど、毎回連絡してくるので、立場が逆転したなあとたまに思う。月に三回会うペースがちょうどいいんだと思う。毎日話すのもよいけれど愚痴や話したいことがたくさんたまつたあとに話せるから、私はその時間が好きだ。むかつくことがあったら、これはりんに愚痴を言おうとか心の中で思ったりする。中学が違っても親友は親友でなんにも変わっていない。そういうところが私の親友だなと思う。大人になったとは思わない。りんは人前ではすごく真面目な子だけれど、私の前だとはしやぎながら、

「この前ね、〇〇がね。」

と笑顔で楽しそうに話している。

自信がなくて友達もできなかった私に、自信をつけてくれた親友に、私はすごく感謝している。本当に出会えてよかったと思う。これからも二人で笑っていききたいと思った。